

不登校の現状及び原因とその対処方法について

鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻学校臨床実践コース 佐藤亨研究室
土佐清水市立下川口中学校 教諭 岩井崇通

1 はじめに

筆者が派遣された鳴門教育大学教職大学院の特色は、院生、勤務校、大学院の3者が協働して勤務校の課題解決を目指す取り組みであり、その中で主たる活動が、2年次に約半年間実施される勤務校での実習である。

勤務校は、僻地と呼ばれる過疎化が急速に進む環境にある全校生徒24名の小規模校で、海、山、川と文字通り豊かな自然に囲まれた県西部に位置している。生徒たちは、自然豊かな落ち着いた環境の中で純朴に素直に育ってきた子どもたちであり、非行面に関する生徒指導等はほとんど必要ないと言えるが、小規模校ならではの課題を抱えている。中でも高知県全体の課題の一つである不登校の問題については、勤務校も不登校傾向の生徒が多く大きな課題であった。筆者が勤務したのは平成21年度のみであるが、その年の生徒たちの欠席の多さには大きな課題意識を持っていた。そこで、過去の欠席状況を詳しく調べた結果が表1及び表2である。

表1 ここ3年間の欠席状況（全校生徒に対する割合）

	平成20年度	平成21年度	平成22年度
年間10日以上欠席者	40%	39%	25%
年間30日以上欠席者	23%	6%	5%

表2 過去9年間を通算した欠席状況（全校生徒に対する割合）

年間10日以上欠席者	25%
年間30日以上欠席者	10%

年間10日以上欠席者の中には、ほとんど30日に近い生徒も多かった。この数値から見ても、やはり欠席数は過年度から多いことがわかった。

このような課題を整理するため、教職員へのアンケート調査やKJ法を用いたワークショップ等の取り組みを行う中で、次の2点を本実践において取り組む勤務校の生徒たちが抱える課題と捉えた。

○つながり（人間関係）の弱さ

最近よく現代社会は人間関係が希薄になっているという言葉を目にする。このことは、一見お互いのつながりが深いように感じられる勤務校のような小規模の集団にとっては無関係のように思われるが、実際は固定化された狭い人間関係ゆえに形式的な浅いつながりしかつくれず関わりが弱いと言える。そのため友だちとの関係においても順調なときはよいが、一度崩れてしまうとなかなか自分たちの力で関係を修正することが困難な場合が多い。その後、その生徒が別の友だちと新たな関係を築くことができるかというと、それは物理的な面から考えても厳しい状況である。実際に友達とのトラブルがもとで欠席がちとなり、一時的な不登校に陥る生徒が見られるなど、先にふれた欠席の多さと大きく関連している。

○社会性、コミュニケーション力、自己表現力の弱さ

固定化された狭い社会（人間関係）の中で生活しているため、慣れない環境や集団の中ではコミュニケーションをはかる力や自己表現する力が弱く、社会性に乏しい生徒が多いと言える。このような実態は、特に校外で行われる文化的行事や部活動の大会に参加した際に顕著に見られ、気持ちのよい挨拶ができなかったり、初対面の人とは自分から関わりが持てず、周りとの馴染むことができにくい生徒が多く見られる。

このような勤務校の現状から、「不登校の現状及び原因とその対処方法について」の中でも人間関係づくりに重点を置いて、予防的な関わりを中心として本実践を行った。

2 研究の目的

現在の教育現場が抱える、いじめや不登校といった学校不適応の問題の多くは、子どもたちの人間関係が根底にある。言いかえれば人間関係不適応の問題と言えよう。人は、この世に誕生した時から両親との関係に始まり、さまざまな人間関係の中で生きている。一人で生きていくことのできない人間にとって、切り離すことのできないものである。そのため人間関係による問題は、昔からどの時代にもあったようであるが、目まぐるしく変化する現代社会においては、ますます難しくなっていると言える。

興(2002)は、かつては人間関係を学ぶ場が多く存在し、その中で生徒たちは人間関係能力を身につけていったが、現在ではその場が少なくなったため、生徒たちの人間関係能力は低下していると考えられると述べ、人間関係能力を身につけることが困難な社会状況があるのであれば、何らかの対応がなされなければならない、ことに学校の中で人間関係能力を身につける必要があると主張している。

このことから考えるならば、同様に人間関係力が低下しており、しかも狭い人間関係の中で自然に任せてはなかなかその力が育たないことが懸念される勤務校の生徒に対しては、人間関係力を育てるための意図的な働き掛けが必要と考えられる。

そこで勤務校における不登校や長期欠席生徒の要因の一つと考えられる人間関係(つながり)の弱さを克服し、よりよい人間関係づくりを促進することを本実践の目的とした。そのための方策として、構成的エンカウンター・グループと定期教育相談を2つの柱として実践を行った。構成的エンカウンター・グループの実践では合わせてコミュニケーション力や自己表現力の育成を目指していくこととした。

3 研究の方法

(1) 構成的エンカウンター・グループ

ア 概要

構成的エンカウンター・グループは、開発的カウンセリングにおける人間関係開発のための集中的グループ体験として、國分康孝・國分久子らによって1970年代後半以降提唱、実践されてきた。現在、学校教育現場で広く普及・定着をしている構成的エンカウンター・グループは、宿泊を伴う集中的グループ体験(ジェネリックSGE)とは異なり、学校の授業という枠組みの中でのエンカウンターであり、ふれあいのある人間関係づくりという特定の目標を持つ「スペシフィック(特化された)SGE」である(片野, 2009)。

また『構成的グループ・エンカウンター事典』(國分編, 2004)には、構成的エンカウンター・グループは、“ふれあいと自他発見”が目標とされており、個人の行動変容を目的としているとある。それによればふれあいとは、本音と本音の交流を意味しており、心と心の通い合う出会い(人間関係)のことで、ホンネとは体感、または「あるがままの自分(真の自己)」のことで、自他発見とは自他の固有性・独自性、すなわちかけがえのなさの発見のことであるとされている。そして、ふれあえばふれあうほどに、自他の違いやかけがえのなさがはっきりしてくる、つまり関係性の中でそれが自覚されるとしている。さらに、ふれあえばふれあうほどに、これらの違いやかけがえのなさが共感され受容されるとも述べられている。

イ 先行研究

構成的エンカウンター・グループは、集団内でのコミュニケーションづくりにも効果的で、人間関係づくりの基礎としてのコミュニケーションづくりを学ぶことができる。また人間関係のつくり方を体験的にシミュレーションでき、お互いに学び合うことができるところがすばらしいと岡田(1996)は述べている。

佐野(1998)は、入学間もない中学1年生を対象に構成的グループ経験を実施し、人間関係づくりを促

進し学校での心の居場所づくりを行った。そして構成的グループ経験を通して意図的・計画的に豊かな人間関係を促進・援助をしてきた結果、課題も残されたが一応の成果は見られたと述べている。

植原(1999)は、中学1年生を対象に対人関係を促進するための構成的グループ経験を実施し、学級内における対人関係を促進する効果があったとしている。しかも比較的短時間の経験で変容をもたらすことができる「効率性」を特徴として挙げている。しかし同時に「効率性」のみが偏重されることでエンカウンターが「人間関係づくり」のための手段としてのみ捉えられることを危惧しており、「効率性」が生かされるとともにエンカウンター体験の質も求めなければならないと述べている。

この他にも構成的エンカウンター・グループが、よりよい人間関係づくりにおいて有効であることは多くの先行研究によって明らかにされている。

(2) 定期教育相談

既に述べたように勤務校においては不登校気味になる生徒が多いが、生徒数が少ないこともあり教職員による目配りが比較的でできており、大きな不適応に至ることは少なかった。そのために教育相談活動という形で改めて対応が行われることは少なかった。しかし生徒は小規模校ゆえに周りの生徒の目が気になり、なかなか普段の生活では不安や悩みを相談できずに内に抱えている可能性がある。そこで個別に話を聞くことで、それらのことを少しでも把握することができれば不適応の予防に役立つのではないかと考えた。特に筆者は、実習期間のみではあるが生徒と同じ場で生活をし、生徒との関係は学級担任や教科担任という立場からは離れていることから、教育相談を行う上では理想的な位置関係と言える。また全校生徒が20名余りであることから、全校生徒を対象としても十分に対応できる人数である。そこで全校生徒と定期的に教育相談を行い、生徒一人一人の現状把握や小さな兆候や変化に気を配ることで、諸問題の早期発見・早期対応を目指したいと考えた。

相馬(2011)は、教師は長い時間子どもたちに接し、集団の中での個人の様子や個人が集団に及ぼす影響を観察・援助できる利点があり、子どもたちに問題が表れる以前に予防的に対応できるのは教師しかないと主張している。そのために教育指導に必要不可欠な、教師と子どもとのリレーションづくりを積極的に進めると同時に、積極的に育てる(開発的)教育相談に力を入れ、「対人関係能力」「コミュニケーション能力」「社会性能力」を育てたいとしている。

『生徒指導提要』(2010)では、教育相談について次のように述べられている。

○教育相談の意義

- ・児童生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図る。
- ・主に個に焦点を当て、面接や演習を通して、個の内面の変容を図ろうとする。
- ・生徒指導の一環として位置づけられるものであり、その中心的な役割を担う。

○教育相談の対象

教育相談は全ての児童生徒を対象とする。表面上は特段の問題なく元気に学校生活を送っている多数の児童生徒を対象として、学校生活への適応とよりよい人格の向上を目指して行われる。

○学校における教育相談の利点と課題

学校における教育相談の利点として、教員と児童生徒が同じ場で生活をしているために、問題の早期発見・早期対応が可能ということが挙げられている。課題としては、同じ場で生活していることで、児童生徒と教員の人間関係が反映しがちであるという難しさが挙げられている。

○定期的教育相談を行う際の進め方

- ・あらかじめ児童生徒について何に焦点を当てるかを一人一人定めておく。
- ・成長が見られた点、よくがんばっている点など、プラスの情報を用意しておく。
- ・児童生徒が自発的に話す場合にはまずは傾聴する。
- ・児童生徒の話が散漫にならないよう、時々明確化しながら聞く。
- ・何を訴えたいのか、本人はどうしたいのか明確にするために質問を挟みながら聞く。

- ・自発的な相談や話題が出てこない場合には教員から具体的な出来事やエピソードに基づいて話題を提供する。
- ・その児童生徒なりの問題解決力を引き出すように心がける。

3 研究内容

(1) 実践計画

ア 構成的エンカウンター

構成的エンカウンターは、校内全体の人間関係づくりを主に考えた全校生徒を対象として行うエンカウンターと、平成 25 年度に予定されている統合に向けて、少しでも人間関係を広げることで統合時の学校不適応等を予防することを目的とした 1 年生対象の近隣校との合同授業の 2 つの実践を行った。

(ア) 校内エンカウンター(通称：ふれあいの時間)

- ・実施対象・・・全校生徒
- ・実施時期・・・第 1 回(2011 年 4 月上旬)、第 2 回(2011 年 5 月)、第 3 回(2011 年 6 月)、第 4 回(2011 年 10 月) 全 4 回

(イ) 近隣校との合同エンカウンター

- ・実施対象・・・置籍校の 1 年生及び協力校の 1 年生
- ・実施時期・・・第 1 回(2011 年 4 月)、第 2 回(2011 年 6 月)、第 3 回(2011 年 10 月) 全 3 回

イ 定期的教育相談

- ・実施対象・・・全校生徒
- ・実施時期・・・第 1 回(2011 年 2 月)、第 2 回(2011 年 4 月)、第 3 回(2011 年 6 月)、第 4 回(2011 年 10 月) 全 4 回 (※放課後を使用し、一人 15 分程度実施。)

(2) 実践

ア 構成的エンカウンター

(ア)校内エンカウンター実施内容

	実施日	ねらい	エクササイズ	授業を終えて
第 1 回	2011 年 4 月 8 日	ゲームを通して出会いを楽しみながら、リレーションを深める。	・ジャンケン列車 ・バースデイリング ・となりのとなり	新年度の生徒相互及び生徒と教師の関わりを促進するための、良い機会となったことを確信できる時間であった。
第 2 回	2011 年 4 月 13 日	自分の生活を振り返り、友達のことについても知る。	・6 カラーズ (グルーピング) ・感情をグラフで表そう!	グラフと共に“できごと”を記入する欄には生活の様子が表れており、生徒理解の面で参考になる資料となった。
第 3 回	2011 年 5 月 11 日	温かい言葉を進んで使う肯定的な人間関係を育てる。	・ふわふわ言葉とチクチク言葉	活動を通して傷つく生徒が出ないように十分な配慮が必要であり、危険も伴うエクササイズであることを改めて実感した。
第 4 回	2011 年 6 月 1 日	お互いが心を一つにする体験を通して、信頼関係を築く。	・トラスタップ	人数が増え難易度が上がると、どのグループも成功を目指して、それぞれに知恵を出し合い気持ちを一つにして協力する光景が見られた。
第 5 回	2011 年 6 月 22 日	自分の良さに気づき他者を肯定的に受容する態度を育てる。	・いいとこさがし	自分のカードを読んで感想を発表する場面では、発表後に拍手が起こる等、一人一人の話をしっかりと受け止められているグループが多かった。

第6回	2011年 10月25日	話す、聞く、聞いてもらえる体験を通して、親密な関係を築く。	・4カラーズ (グルーピング) ・さいころトーク	今回の活動は、グループ内の雰囲気が大きな影響を与えているように感じられ、構成メンバーによって活動に差が見られた。
第7回	2011年 11月10日	自分が必要とされる体験を通して、居場所を感じ自己肯定感を高める。	・教室はどこだ！	内容的に少し難しいのではないかと感じていたが、生徒たちの食いつきは良く、どのグループも意欲的に活動ができた。

(イ) 近隣校との合同エンカウンター実施内容

※当初は、1年生を対象に3回実施する予定であったが、2・3年生対象の授業を4回目に1時間のみ実施をした。

	実施日	ねらい	エクササイズ	授業を終えて
第1回	2011年 4月18日	初めての出会いを皆で楽しみ、リレーションを深める。	・名刺交換ゲーム ・となりのとなり ・背文字送り	もう少し活発な授業ができるのではないかと考えていたが、予想以上に学校間の交流の難しさを実感した。
第2回	2011年 5月17日	自己理解・他者理解を深め、相互理解に繋げる。	・集合ゲーム ・この指とまれ！	前半は生徒たちの表情や動きが硬く活動も盛り上がらなかったが、後半では少しずつ良い雰囲気が感じられた。
第3回	2011年 6月21日	自分たちの力で課題を解決していく中で、信頼感や協調性を高める。	・みんなでジャンプ！ (大縄跳び)	これまでにない生徒たちのやる気と頑張りを見ることができ、全員が心を一つにして取り組んでいる気持ちが伝わってくる授業であった。
第4回	2011年 10月11日	体と体のふれあいを通して、楽しみながらリレーションを深める。	・ジャンケン列車 ・人間知恵の輪	男女別での活動が多かったため同姓同士の交流が中心ではあったが、1年生の最初の授業と比べ、随分と活気のある授業であった。

イ 定期教育相談

	実施時期	ねらい
第1回	2011年2月7日～3月8日	生徒と話ができる関係をつくる。
第2回	2011年4月28日～5月11日	・入学後の中学校生活の心境について話を聞く。 ・進級後の心境について話を聞く。
第3回	2011年6月23日～7月1日	“ふれあいの時間”の授業について聞きながら話をすすめる。
第4回	2011年10月23日～11月10日	事前に行ったエゴグラム分析結果を伝え、自分を振り返るきっかけとする。

《定期教育相談を終えて》

生徒たちは、皆、素直に話に応じてくれた。学習に対する意識が低く授業中はよく寝ている姿を見かける生徒も、いい表情で話してくれた。しかし最初の内は、「何か悪いことをした？」と言いながら面談にやって来る生徒も見られ、いくら小規模校の生徒とは言え先生と話をする時は悪いことをした時だと、これまでの経験から感じている生徒は多いようであった。また慣れない頃は、やり取りが単語で終わりあまり話をしてくれない生徒には、一方的に質問攻めのようになっていた。沈黙に耐えることが必要だとわかっている、生徒にプレッシャーになるのではないかと思います耐えきれずにこちらから話しかけていた。しかし、そうすることで余計に生徒は話してくれなくなることに気づき、回数を重ねるうちに少しずつじっくりと待てるようになってきたように思われる。

話の内容以外にも生徒の視線、表情、姿勢、言葉使い、声の大きさ等について細かく観察していると、言葉以上にその人の内面をよく表現していることがわかった。安藤(2008)は、言語伝達は送り手によってコントロール可能であるが、非言語的伝達は全てをコントロールすることは難しいため、五感を駆使して非言語的メッセージを読み取ることは、送り手の真意を理解することに等しい、と述べている。

4 成果と課題

(1) 構成的エンカウンター

ア 校内エンカウンター

授業後のふりかえり用紙のアンケート集計結果から見てみる。「今日の活動は楽しかったですか？」という質問には肯定的回答が 83%、「今日のような活動をまたやりたいですか？」という質問には肯定的回答が 75%であった。生徒たちの多くが“ふれあいの時間”を好意的に受けとめ、「またやりたい」と楽しみにしてくれていたことは成果と言えよう。多種多様なエクササイズを通して幅広くアプローチできるエンカウターの技法から、様々な形で人と関わることの楽しさを味わうことができたと考えられる。

生徒の感想には、「あまり関わりのない他学年の人のことを知ることができた。」という意見が多く、小さな学校でも学年が違くと交流の機会は少なく、全校生徒で取り組めたことは学校全体の人間関係をつくるうえで効果的であったと言える。他にも、「積極的に話しかける方ではないが、いろいろな人と交流ができた。」また「自分のことについてあまり話したことがなかったけど、相手に自分のことを伝えることができてうれしかった。」等の意見も多く見られ、エンカウンターでふれあえる場を意図的に仕組んでいくことは、生徒相互の関わりを広め深めていくと同時に個々の生徒の思考や行動に影響を及ぼしたことが考えられる。

教員への“ふれあいの時間”についてのアンケート調査の結果は、答えてくれた全教員が肯定的な回答であった。具体的な意見としては、「特に年度当初の新生を迎えた学校全体のリレーションを深めるために効果的であった。」というものや、「学年を超えて活動することで広い人間関係を見ることができた。」また「全校生徒で授業に取り組めるという小規模校ならではの利点を生かした実践を継続していくことは効果的と思われる。」というような多くの意見を聞くことができた。

今回の授業実践を通して、授業という枠の中で幅広く誰とでも関わりを持たせることにより、お互いに新たな気づきや発見が生まれ友達を見る目や関わり方が変わることで、これまでの関係性が崩されることにも繋がり、人間関係の再構築やより良い人間関係の促進に効果的であることが実感できたように感じられる。

課題としては、特にグループ活動では3年生をはじめ上級生の影響が大きいと思われる点や、下級生にとっては抵抗を感じることも心配されるので、学年を超えた活動においては下級生に対する配慮が必要と思われる。また自己開示や自己主張を促したい場面や適切な介入が必要な場面で十分な対応ができずに指導者としての経験不足が感じられた。

イ 近隣校との合同エンカウンター

1年生は、最後の授業で皆が気持ちを一つにして一生懸命に挑戦することで、自分たちも気づいていなかった集団としての力を発揮できることを知り、小さなことではあるが何事にも自信の持ちにくい生徒たちの自信につながったと思える。

2・3年生は、授業前は乗り気ではない生徒が圧倒的に多かったが、授業後には思っていた以上に仲良くできて楽しかったという感想がほとんどであった。同年代の他校の生徒との交流は、新鮮で大きな刺激になったと思われる。3年生にとっては、来年の春から同じ高校へ進学する生徒も多く短い時間ではあったが、よい出会いの場となったと思える。

今回の合同授業を通して見えてきた生徒の課題としては、集団としての力の弱さ、ここぞという時に力を発揮できない気持ちの面での弱さや決断力が弱い生徒が多く見られる等自信のなさが感じられた。これらの課題の根底には、やはり閉ざされた狭い人間関係の中で生活している小規模校ならではの問題が少なからずあると思われる。

(2) 定期教育相談

教育相談とは言うものの、自発的な相談とは違い呼び出しての面談であるため始めのうちは難しさも感じたが、回数を重ねるうちに生徒たちの緊張感も和らぎ教育相談が定着してきているように感じられ、

徐々に自分の思いを話してくれる生徒も出てくるようになった。また、特に言葉のやり取りはなくても生徒一人一人と一つの空間で同じ空気と時間を共有する中で、その表情や態度から相手の思いを十分に感じ取ることができ、お互いの距離を縮めることができたように思う。他には、自分の考えや思いを話すことが苦手な生徒が多い置籍校の生徒たちにとって、1対1の適度な緊張感の中で話をすることは相手に自分の思いを伝える訓練としても良い経験になったと思われる。

課題としては、十分な職員間での情報の共有化ができなかったことである。事前には、校内研修会等を利用し全職員で生徒個々の情報交換や情報の共有化をしていきたいと考えていたが、実際には面談の記録に筆者なりの考察を加えて学級担任にお渡しすることしかできなかった。事前の細かな日程確認等、職員との打ち合わせや準備ができていなかったことを反省している。

5 まとめ

本実践では、不登校及び長期欠席生徒等の予防に向けて、生徒相互のより良い人間関係づくりを促進するための取り組みとして、構成的エンカウンターと定期教育相談を実施した。なかなか短時間で結果を求めるのは難しいことであるが、

- ・授業の中で意識して全校生徒が関わり、ふれあえる場を仕組んでいくことは効果的である。
- ・他校の生徒との交流を通して置籍校の生徒たちの課題を客観的に再確認ができたと共に、外部の人との関わりを通して他人に揉まれる体験は生徒たちにとって大切である。
- ・全校生徒と個別に話をする時間と場所を定期的に確保することは、生徒理解や諸問題の予防に向け小規模校だからこそできる有効な手段である。

ことを実感することができた。

最後に、今年度の現在の欠席状況は下記の通りである。先に提示した、ここ3年間と過去9年間の欠席状況と比較すると随分と改善されていることがわかる。これは、日々一人一人の生徒と丁寧に関わってきた現場の先生方の努力の結果であるが、本実践も微力ながら少しでも貢献できたとすれば幸いである。

表3 平成23年度の欠席状況（全校生徒に対する割合）～2012年2月24日現在～

年間10日以上欠席者	8%
年間30日以上欠席者	0

《文献一覧》

- 1) 片野智治 2009 『教師のためのエンカウンター入門』図書文化
- 2) 國分康孝(編) 岡田弘(編) 1996 『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』図書文化
- 3) 國分康孝・國分久子(総編) 2004 『構成的グループエンカウンター事典』図書文化
- 4) 興幸雄 2002 「特別活動における関係づくりの試み—学級活動での構成的グループ・エンカウンターの可能性—」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要教育実践研究』No.3 2002 pp.11-20.
- 5) 文部科学省 2010 『生徒指導提要』教育図書
- 6) 岡田守弘(監) 芳川玲子・安藤嘉奈子・中島香澄(編) 2008 『教師のための学校教育相談学』ナカニシヤ出版
- 7) 佐野富子 1998 『中学生の対人関係を促進するための援助に関する研究—構成的グループ経験を通して—』鳴門教育大学大学院学校教育専攻生徒指導コース修士論文
- 8) 相馬誠一 2011 「教育相談と生徒指導」『月刊生徒指導』10月号 プラスワン p.36-37
- 9) 植原浩之 1999 『中学生の対人関係を促進するための構成的グループ経験の研究』鳴門教育大学大学院学校教育専攻生徒指導コース修士論文